

武蔵野日曜集会（婦選会館）

十字架

――マルコ伝第8章27～38節――

1963年4月7日

小池辰雄

極刑中の極刑 なんじはキリストなり 汝は神のことを思わず 天地一体 一日永遠 天国体
サタンよ、退け なんぞ我を迫害するか 己が十字架を負いて 共に十字架せられたり エン・
クリスト 突破の道 愛せざるを得ず 信行一如 十字架と復活と聖霊 二重の戦い 逆に救
い上げていく 四つのし 天的現実 愛の力をもつ

【マルコ8・27～38】

27 イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途^{みち}にて弟子
たちに問いて言い給う『人々は我を誰と言うか』28 答えて言う『バプテスマ
のヨハネ、或人^{ある}はエリヤ、或人は預言者の一人』29 また問い給う『なんじら
は我を誰と言うか』ペテロ答えて言う『なんじはキリストなり』30 イエス己
がことを誰にも告ぐなと彼らを戒め給う。31 斯^{かく}て人の子の必ず多くの苦難^{くるしみ}を
うけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日の後に甦^{よみがえ}るべ
き事を教えはじめ、32 此の事をあらわに語り給う。ここにペテロ、イエスを
傍^{かたえ}にひきて戒め出^いでたれば、33 イエス振^{ふりかえ}反りて弟子たちを見、ペテロを戒め
て言い給う『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思わず、反^{かえ}つて人の
ことを思う』34 斯^{かく}て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう『人もし我
に従い来らんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。35 己が生
命を救わんと思う者は、これを失い、我が為また福音の為に己が生命をうし
なう者は、之を救わん。36 人、全世界をもうくとも、己が生命を損^こせば、何
の益あらん。37 人その生命の代^{しろ}に何を与えんや。38 不義なる、罪深き今の代^よにて、
我また我が言を恥^はずるものをば、人の子もまた、父の栄光をもて、聖なる御
使たちと共に来らん時に恥^はずべし』

●極刑中の極刑

私たちはキリストの十字架を受けとることにおいて、これでいいというところはひとつ
もありません。この生涯を終わるまで、キリストの十字架を身に受けていかなければなら
ないわけであります。



「十字架」と一口に言いましても、十字架という現実にはあまりにもすさまじい現実で、私たちにはちよつと想像もつきません。これは極刑中の極刑で、非常な刑罰です。キリスト教会では、教会堂の屋根に十字架があつたり、また礼拝堂の中央に十字架が立てられてあつたり、いろいろです。また、キリストの磔^{はりつけ}になつている像が――私はドイツでたくさんそういうのを見ましたが、ああいう生々しい彫刻はどうも困るんですが――そういうようなものもあります。

けれども、それはみなただ一つの徴であるに過ぎないので、私たちが「十字架」と言うときには、本当に我々の想像を絶する二千年前のキリストの十字架と、かつまた現に今、我々に迫ってくるものの、その十字架のキリストということでもあります。

●なんじはキリストなり

マルコ伝の8章27節から少し読んでいきます。

27 イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、

これはガリラヤの湖の北の方にある少し山間の所です。そこまで私は行きたかったけれども、行きませんでした。

途^{みち}にて弟子たちに問いて言い給う

というその句の間には、おそらく、その村々に出て行かれて語られ、また、その山間で深く祈られたというような内容があつたと思われる。

『人々は我を誰と言うか』²⁸ 答えて言う『バプテスマのヨハネ、或人^{ある}はエリヤ、

モーセとエリヤというのは非常に靈的に高次の預言者でありましたが、9章のところになると、変貌の山でこのイエスがモーセとエリヤに会つたことが書いてある。

或人は預言者の一人』

エレミヤみたいな預言者のことでしょう。

29 また問い給う『なんじらは我を誰と言うか』

お前たち、弟子たちは私を誰だと言うかと。「私は誰だ」という言い方も面白い言い方です。ナザレのイエスですけれども。「誰」ということは、「どういう者か」ということです。

ペテロ答えて言う『なんじはキリストなり』

マタイ伝18章の方では、

「なんじはキリスト、活ける神の子なり」

とあり、マルコ伝では、

「なんじはキリストなり」

と、非常に簡単なんです。ルカ伝9章の方も、

「なんじは神のキリストなり」

という表現になっております。マルコ伝の方は一番簡単に、「なんじはキリストである」メ



シヤであるという。ユダヤ人が「メシヤ」と言うときには、神の王国を建設する救世主としてのメシヤであります。また、そういったメシヤを今のユダヤ人もなお待ち望んでいるわけです。イエスの意味するところのメシヤというのは、それとは天地の差があるわけです。

30 イエス己がことを誰にも告ぐなと彼らを戒め給う。

ペテロはこの時に初めて、

「なんじはキリストである。神の子である」

という非常に決定的な表現をしたというわけであります。

ところが、マルコ伝5章のところを見ると、穢れた霊に憑かれた或る人が、非常にわめき騒いで仕方がないのがありました。

7 大声にて叫びて言う『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、

神によりて願う、我を苦しめ給うな』(マルコ5:7)

と、叫んでいるのがある。霊的なものは、相手が神の子であるということを既に見ている。弟子たちや親しい人たちには、神の子であるということが分からない。けれども、むしろ霊的な存在はそういうことが、悪霊であつても、分かるわけです。

ペテロがこの時に、

「汝はキリストなり」

と言った告白は非常に天的な示しがひらめいたというわけで、キリストがこれを喜ばれたということはマタイ伝のところにもあるとおりです。このイエスのペテロに対する言葉が、学問上どうであるかという問題とは別に今、問おうとは思いません。

● 汝は神のことを思わず

31 斯て人の子の必ず多くの苦難をうけ、

「多くの苦難をうけ」という、その苦難という中には十字架のことが入っているわけです。

長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、

この「殺され」はもちろん十字架の死です。

三日の後に甦えるべき事を教えはじめ、32 此の事をあらわに語り給う。

初めてその時に、弟子たちにははつきりと言われた。いよいよ時が迫ったというので。キリストの十字架また復活の予告というものは、三回にわたってなされております。

ここにペテロ、イエスを傍にひきて戒め出でたれば、

この「戒める」というのは非常に厳しく言いとがめることです。

33 イエス振反りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言い給う『サタンよ、わが

後に退け、汝は神のことを思わず、反つて人のことを思う』

今しがた、「汝はキリストである」と答えて、非常にキリストに褒められたペテロが、その次の瞬間には、「サタンよ」と言われる。同じ、



「汝は神の子、キリストである」

とペテロが告白しましても、ペテロの告白の中の本当の意味は、ペテロ自身には本当は受けとれていない。であるから、こんなことを言うわけです。キリストの方は、そのペテロの言葉の奥に大事なものを見られたから、その言葉においてペテロの告白をよしとされたわけです。しかし、この人間ペテロという者は非常に躓きやすい男でありますので、また次の瞬間には人間的に、

「どうかそんな苦しみを受けて死ぬようなことは仰らないでください」

と言うようなわけです。そこで、

「サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思わず、反って人のことを思う」

と言われた。

●天地一体

私たちは本来、神の子です。神の似姿に造られている。創世記にあるように、人間は誰であろうともみな神の子である。小さな乳飲み子なんかを見るときに、それが将来どのような極悪人になるかも知れないけれども、しかし、誰もそんなことを予想しはしない。誰も幼子を見て、この野郎なんて思う人はいないわけです。その幼子の姿を見て、キリストは

「このようであれば、神の国に入ることができない」

と言われた。非常に素直な、全的に親に信頼する、また、全的にものに感動する、喜びまた泣く、そういったすべてが無雑な心根です。全的である。すべてが心いっぱいということです。そういうのが神の国の民である。私たちは本来、そういうような質をもっている。もちろん、アウグスティヌスが告白しているように、

「幼子の中にも不純なものがある」

と、心理的にいえば、それは言えないことはない。

けれども、本来、どんなに私たちが質的に脱落し、また歪^{ゆが}んでいても、そこにはとにかく影として、影の如きものとしてでも、事実、神の姿の影が宿っている。神の顧みが私たち一人びとりにあります。この神の顧みというものが、我々一人びとりの中に映っている。神の姿が、神の影がここにさしている。神の光が射している。

ただ問題は、その光を本当に受けとろうとしない。そこに問題があるので、神の光を本当に受けとろうとすることが即ち、

「神のことを思う」

ということです。ところが、神はそっちのけで、傍若無神であって、傍ら神無きがごとくにして、人や地上のことだけを、天のことではなくて地のことを、神のことではなくて人のことを思う。

地そのものは何もわるくはない。人そのものも何も悪くはない。地はするように設けら



れたものであり、人の住むべき場所として実にここに――御意の天に成るように地にも成らせようとして――地上に天国を現じようとするのが神の本願であるわけです。天地一体となることが、これが神さまの本願であるわけです。創造は即ち、天的なものが地的な角度に展開してきた神のわざですから。

だから、本家本元を思わなかったならば、こちら側だけであつたなら、どうにもならないという、非常に自明なことなんです。私たちは、しかしながら、みな相対的な現実を問題とし――そのことは悪くはない。相対的現実を問題にしなければなりませんけれども――しかし、相対的な我々のいろんな、政治経済、一切の学問、産業、事業、そういった一切のことが本当に正しい角度になっていくためには実は、天的な要素がその中に本当の中心になっていかなければ始まらないということなんです。

●一日永遠

実は、万人の一番具体的な関心事の根源は宗教にある。宗教を何か後生願いのように思つてみたり。非常にこれは間違ひはなしです。我々の現実の相対的現実をいかに本当に生きるかというためには、天的なものがここに入つてこなければ本当にならないということです。このことに対する認識と、それから、勇敢なそれへの取り組みということをなかなかやつてくだらないわけです。

今の若い方に限らないけれども、これはぜひ、その角度に突き進んでください。何を勉強しても、何をやつても、何を研究したつていいですよ。何をしたつていいが、その一切の事柄の奥に――

「神のことを思う」

というのは、ただ思うことではないですから――神の現実を受けとるということによつて、天的実質を受けとるということによつて、はじめてこの相対的現実の中に、それがどんなに有為転変、^{はかな}儚いように見えましても、儚きものの中に儚からざるものが展開していく。

今日という過ぎ行く一日の中に永遠というものが切り込んで、今日一日が、本日が即ち永遠である。本日を即ち永遠として生きなかつたら、人生は生き甲斐がないわけです。

「一日は千年の如く」

とペテロが言つたけれども、この一日は永遠の如くなんです。一日を永遠の如く生きる人がある。内村鑑三先生が「一日一生」と言つたけれども、もう一つ突き抜けて、一日永遠と言つていいわけです。日々を永遠の質で生きる人は、いつ死んでも

「アーメン、ハレルヤー!」

と言うことのできるひと。その人が本当に現実を――人々に下らないと思われ、つまらないと思われることを――本当に真剣にする人になるんです。それがどんなに消えていこうが、結果に表れてこなかるうが、人にどんなにけなされようが、そのやっている事柄の中



には、神さまの目から見ると、永遠というものが宿っている。滅びざる質が減びるものの中に入っている。こういう生き方をする。学生だったら、そういう勉強の仕方をすれば、落第したっていいよ。学校を落第したって構いやしない。けれども、本当にそういうように生きているかという、その質の問題であります。

私は先生なんかしているけれども、もう来年でお終いで、せいせいします。教師なんてことをしていたって、試験なんか一つもしたくはない。本当の生徒の実質、本当の価値というものは分からないから。人は生まれつきいろんな才能でもってハンディキャップがある。ちょこつとやってすぐ100点をとれるような者もいるし、一生懸命やってもなかなか40点や50点しかとれない者もいる。けれども、それはどちらが本当に生きているかという、一生懸命にやって50点生きている方が神さまの学校では及第する。

●天国体

そういうわけでありまして、どうか、皆さんは、ものの判断や生き方というものを、永遠の相において、永遠の角度においてやってもらいたい。それが即ち、

「天のことを思う」

ということですよ。真に天のことを自分のうちに受けとる人は実は、天的なものをこの地上に現じている人、天国体であります。天国の体からだなんです。天国体となつて生きることが、本当に

「聖国を来たらせ給え」

という祈りを、自ら存在をもつて、実存をもつて祈っている人なんです。ところが、いわゆる幸福を――ヒルティーが「幸福論」なんていうのを書いたけれども、ヒルティーの「幸福論」はそういう意味ではありません。キリストがまた、

「幸福さいわいなるかな」

と山上の垂訓で仰っている「幸福」というのはそういう意味ではないけれども――いわゆる地的な意味においての幸福を目安とするのが人間の人情なんだよね。けれども、そういった地的な幸福でもって、この世の条件をなるべく良く満たそうなんて思って、右往左往し左顧右眄して生きていたら、いつまでたつても始まらない。

●サタンよ、退け

その角度で、このペテロが、

「先生、それはちよつと無理なことはしないでください」

というようなわけで、袖引き止めた。そうしたら、

「サタンよ、退け」

と言われた。その前にペテロを大いに喜んだキリストは、その次には今度は「サタンよ、



退け」と。キリストというひとは、真理を見てものを言うひとでありまして、いわゆる人情にからんでものを言つてはいない。惜しむべきペテロですが、しかし、ペテロを憎んでいるわけではない。

「お前は、いい時はいいが、またダメになると、すぐそういうようになる」

と。湖の上を渡ってきたかと思えば、風を見て恐れて沈みかかったり、ペテロというのは波みたいな人ですからね。これはみんな私たちも同じことですが。

それで、キリストはこのペテロに向かって、「サタンよ」と、こうきたです。ペテロをして、かく言わしめているところの、その心にかかっているところのサタンのもの。サタンに囚われているその姿。それを見て、「サタンよ」とはつきり言つた。

まあ、今、私があなたの方の誰かに、「サタンよ」なんて言つたら、みんな怒つてしまうね。私はキリストでないから、そんなことは言えないけれども、もし何か間違つて、「サタンよ」なんて言つたら、そしたら大体、どうかなつてしまう。

けれども、キリストの言葉はどんなに激しくても、奥には愛があるんです。愛があるから、激しさがある。激しさが決して人を審いてはいない。およそ「激しい」というなら、いくらキルケゴールが悪口言つたつて、ルターが激しいことを言つたつて、イエス・キリストの言葉くらい激しい言葉は世の中にはないですよ。非常に水を割つてない言葉です。でありながら、私たちがこれに引きつけられるとはどういうことか。

本当は、なかなか引きつけられていないんですがね、普段。普通のキリスト教ではね。「キリスト教」だなんて、「教え」だなんて思うから。これは教えではないんだ。キリストは本当に、自分の全存在をぶちまけて、相手に告白しているのですから。これは告白、大告白なんです。

「サタンよ、退け」

なんていうのも、これはみんなキリストのやむにやまれない全的な言葉です。告白に対するには告白をもつてしなければ、福音というものはつかめない。「について」語つてみたつて、「について」研究してみたつて、そんなことはいつまでたつてもダメです。相手の気合にのつかつていかなければ。

●なんぞ我を迫害するか

「サタンよ、わが後ろに退け。汝は神のことを思わず、かえつて人のことを思う」

と一遍、ペテロを突き飛ばすようなことを言つた。突き飛ばされてぶつ倒されて、ペテロが今度は起き上がる。パウロもそうですよ。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と言つて、キリストはダマスコ途上でもの凄い光をもつて現れた。サウロ(後のパウロ)はぶつ倒れてしまった。ぶつ倒されて、パウロは今度は、アナニヤの按手によつて起き上が



らされた。

「我が眼より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と。人間というものは、なまやさしいことで救われるものではないんです。今のキリスト教はすこし安価すぎる。だから、いつまでたつても、「クリスチャン」というレッテル・クリスチャンはたくさんいるけれども、神の眼からこれはキリストのものという人が

「天才よりも少ない」

と、ある意味では言えるでしょう。天才よりも少ないけれども、しかし、誰でもが必ず成れるんです。天才には、これは成れない。生まれつき決まってしまうている。けれども、クリスチャンは天才よりも尊いが、しかし、その天才よりも尊い存在に誰でも例外なしに成れる。そういう不思議なものです、このキリスト者というものは。問題は、どこまでも私たちは質的なものにならないといけない。パウロ、ヨハネ、ペテロの使徒たち預言者たちと同質なものになる。「使徒」というと、何か昔のキリストの直弟子たちで、何かえらいランクの上の方について、とうてい近づきたいと思ったり、カトリックの「聖者」とか何とか言って段階をつくっているようなのは、冗談言ってはいかん。ただ一人の義人キリストの他はすべてこれ罪びとです。パウロ自身も、

「我は罪びとの首かしら」

と言った。

「ああ、我悩めるかな、この死のからだより我を救わんものは誰ぞや」

と言った。救われているパウロがなお、そういう叫びをしなければならないパウロである。そういう、私たちはみな同じくキリストの前には、五十歩百歩、みな罪びとにすぎない。比較研究なんかする必要は何もいらん。問題は、あの人たちが本当に全的にキリストの、この天を、天国の芥種を――

「芥種一粒の信仰」

というけれども、これは「芥種という信」ですよ、芥種という信が彼の中に入ってきた。聖霊のことです――この芥種をもつかもたないか。「芥種」の話はこの次にします。「芥種」の話をするのではないけれども、復活の生命のことはイースターでもって徹底的にやらなければならぬ。その前にどうしても、十字架を通らなければ、どうにもならないけれども。

●己が十字架を負いて

それだから、キリストはこの期に乗じてこう言われた。

³⁴斯かくて群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう

これは、みんなを呼び寄せた。遺言みたいなものだ。

『人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。

³⁵己が生命を救わんと思う者は、



この「生命」という字は「プシヘー」という字です。

これを失い、我が為また福音の為に己が生命をうしなう者は、之を救わん。

³⁶人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん。³⁷人その生命

の代に何を与えんや。³⁸不義なる、罪深き今の代にて、我また我が言を恥ず

るものをば、人の子もまた、父の栄光をもて、聖なる御使たちと共に来らん

時に恥ずべし』

「己をすて、己が十字架を負いて」

と、このマルコ伝もマタイ伝もルカ伝も、みんな「己が十字架を」という。ルカ伝には

「日々、己が十字架を負いて我に従え」

と、「日々」という言葉が特に書いてある。毎日です。「己が十字架を」という。人の十字架ではない。自分の十字架。私たちはみな自分の――キリストは自分の十字架を負われた――私たちもまた自分の十字架を負って行く。

私たちは古い訳の聖書を読んでいて、こういう文語調だから、「己が」なんていう言葉は私にはほとんどもう口語体なんですよ。それだから、私はヒルティーの『眠られぬ夜のために』を訳すときに、こういう表現をしていると、「これは難しい」と言う。今の方は、よほど易しく言わないといけない。私もよっぽどその点では気をつけないと。けれども、日本語の表現が何だか非常に貧弱になって――こんなこと（「己が」ということ）はどうでもいいですよ――けれども、非常に日本語の表現が貧弱にされてしまっていて、情けなく思う。

●共に十字架せられたり

無教会に私は育ちました。

「十字架、十字架」

と散々言われてきた。無教会はとにかく、この「十字架」一点張りです。

「キリストの十字架を信じることによって義とされる」

という、マルチン・ルターのひとつの命題みたいな言葉、プロテスタントのひとつの命題みたいな言葉ですけれども。

「十字架の信仰」

なんていうわけです。キリストの十字架によって罪が贖われ赦され、それによって義とされるという。それはいいですよ。だけれども、そういった命題を信じこんで、それでそれが「信仰」だと思っているようなことに、ややもするとなってしまう。悪くはないですけども、それでは……。

月は光もろともに、水底に宿るんです。月の光が、月が水の底に宿るような受けかた。水は静かです、清らかである。そうすると、これが宿ってくるわけですね。

内村鑑三先生が――もちろんいろんなことを仰ったから、決してそれだけではありませ



んけれども——よく「十字架を仰ぎ瞻^みる」ということを言われた。また、書いておられる。十字架を仰ぎみるという。教会堂にもみんな十字架があつて、十字架を仰ぎみる。無教会では、十字架を立てはしませんけれども。もちろん、十字架を仰ぎ見るのはよろしい。けれども、パウロがガラテヤ書2章20節で言っているとおりに、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

と。この「十字架される」ということ。十字架につけられることです。「十字架せられたり」という、これは完了ですよ。「十字架されたり」という完了は、もう仰ぎ見ているような現実とは違うんです。

「私はキリストと共に十字架されたり」

と。私は自分が——さっきのキリストの

「己が十字架を負え」

はちよつと今はしばらくお預けです——キリストの十字架において十字架されてある。二千年前に十字架されてある。そのことは単なる二千年前ではなくて、過去完了ではなくて、現在完了、毎日の現在完了形である。

これは自分ではできないんです、「十字架される」ということは。私たちは自分で自分を十字架するということはできない。もし、私たちが自分で本当に自分を十字架することができるならば、即ち、自我というものに本当に打ち勝ち——いいかえれば「罪」です——「我」という罪に本当に打ち勝つならば、キリストの十字架の贖いはいたずらである。その必要はない。私たちは我に打ち勝つことができない、本来敗北者です。ええ、一時的には勝つよ。けれども、究極的にはダメなんです。本質的にはダメなんです。

「いや、私はダメではありません」

と思う人は、ひとつやってみてください。仏教の世界でも、キリスト教の世界でも、偉大な僧侶たちはみなこいつにぶつかって、この岩にぶつかって、みな倒れてしまった。

マルチン・ルターも、

「いかにして神の前に義たらんか」

という問題でとつくんだ。彼は模範僧であつた。誰がみても実に立派な修道僧であるが、彼自身の中には本当の平安も喜びもない。とうとう苦しくなつて倒れて、もう少し放っておけば、ルターは死んでしまった。ドアを蹴破つて入ってみたら、ルターはまっ青になつて倒れていたところだった。彼は真剣に

「神の前においていかにして自らが義たらんか」

という、この問題にとつくんで、そこに宗教改革の糸口が開けてきたわけです。ルターの胸三寸の中におけるこの真剣勝負で、彼がぶつ倒れそして、キリストの十字架が自分にとって何ものであるかに気がついたときに、そこに宗教改革の火がともった。

これが近世の「クリスチャンの自由」という、



「本当の魂の自由とは何ぞや」

ということです。ところが今度は、その神に与えられたキリストの自由を私して、今の近代人はただ「自由」とか「民主」とか言ったって、これはダメですよ。神さまに与えられた角度を忘れて、「自主の自由の」なんて言っても、それはダメです。そう言うと、

「それは宗教的にはそうだろうが、人間は本来は自由ではないか」

なんて、それは道徳哲学的にはある程度言えても、それは言えるだけの話であって、事実、力にはならない。事実、生命の世界、力の世界となったら、どうしても我々相対的なものがある絶対的なものと連なるまでは、力は来ないんだから仕方がない。これは事実です。いくらくどいたって、いくら言い張ったって、これはしょうがないです、事実だからね。魂の事実はごまかしがきかないんだから、仕方がない。

●エン・クリスト

「我々の魂は汝の懷の中に休ろうまでは安きを得ない」とアウグスティヌスが言っているではないか。

「私たちはどうしても、あなたの懷の中に休らうまではどうにも平安がないのです」

と、これが万人の無意識的な、本当は呻きなんです。けれども、その呻きを本当に自分の呻きとしないからダメなんです。本当にその呻きにきてごらん。

これはキリストの懷に飛び込まなければ。私はよくこの「キリストの懷^{ふとこ}」ということを言います。「エン・クリスト」「キリストの中に」ということです。内接円です。内接円にならなかったら、これはクリスチャンではない。

そこで、私たちがそのような内接円になるためには、どこの関門を通るか。キリストの懷の中に、そう簡単には入れませんよ。キリストの懷が、胸が開いている。その胸は一体何か。その胸襟をキリストは開いていらつしやる。その胸襟を開いておられる、その開いてるところには十字架が立っているわけです。十字架という門を通って、この関門を通って――

「我は門なり」

というのは、

「我は十字架という門なり」

ということ――この門を通って、懷の中に入る。

十字架されることのできない、このしょうがない、我を乗り越えることもできない、どうしても罪に打ち勝つことのできない、神さまと直結できない、この私たち人間、仕方がないやつ。

「人間この不可解なるもの」

という。実に人間というやつは不可解なものです。この仕方がないどうにもならないもの



というやつ、人間。これがどうにかなるなら、もう世界に戦争なんかありませんよ。結局終いには、バーンなんてやつちゃうのが、これが人間です。

フルシチョフとケネディとの間に直接の電話だか、通信だか知らないけれども、できるようになったという。これは両方が恐ろしいからなんだ。どういうきつかけで戦争になったらいかんからというわけで、直々の話合いができなければ困ることなんでしょうね。それほどまでに、お互いが、何かいろんな方途でもって、危ない事を防ごうとしている。一体、危ない事とは何ですか。危ない事とは人間の心がつくっているものであります。人間の心ほど危ないものはない。この心が危ないということは、心が罪そのものに染まってしまうということ。この心、魂――フルシチョフやケネディの心や魂――一人ではどうにもならないという。代表者だつて、お互いに本当に握手したくても、何かいろんなものが重なっていてどうにもならないという、実に不可解なもんですよ、国家なんていうものは。そういう、どうにもならないものだから仕方がない。いろんな方途をつくったつてダメなんです。要するに、問題は国家を形成している各個人。各個人の中心である魂です。すべての問題はこの魂の問題に帰着する。

●突破の道

さつき36節で、この魂を、

「人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、何の益あらん」

とキリストが言われた。「プシヘー」（生命）の問題です。煮詰めてみると、結局、その焦点はそこにくる。こいつがどうにもならない。これは人間の側ではどうにもならない。そこに絶対恩寵の神の救いの道が開かれてきたというのが、ナザレのイエス・キリストという存在です。

これが人間のどうにもならないものを――どうしてもそいつを切り開かなければならない――神さまがイエス・キリストを通して人間の罪の世界を突破し、ぶち破る。正に突破です。この我々を貫き通すところの突破なんです、この十字架というのは。

「お前は自分で自分を飛躍し突破することはできないだろう。しからば、私がその

突破の道を開いてやるから」

と言って、両手を広げて、

「彼らは為すことを知らず。彼らを赦してやってくれ」

と。十字架されているキリストが「赦してやってくれ」という祈りは、実力のある祈りであります。空念仏ではない。行為が言葉に先んじているんです。

「始めに言あり」

と言うけれども、

「始めに行為あり」



と、ゲートルがあの『ファウスト』の中で訳し変えている。そういうところはなかなかゲートルというのは愉快です。

「最初に即ち恵みの行為ありき」

と。出エジプトという行為があつて、それから、律法が与えられているんです。本当は恩寵が律法の先にあるんです。

キリストは、キリストという無言の言^{ことば}です。パウロが

「十字架の言」

と言つたけれども、

「十字架という言ならざる言」

ということなんだ。私は本当にそう訳したいね。「十字架という言」なんていうと、十字架という何か言葉かと思つて、十字架さえただ称えていればいいかと思つている。冗談じゃない。十字架という言葉にもならない、この神さまの恩寵そのものの表現が「言」なんです。

「わが言は靈なり生命なり」

という。

●愛せざるを得ず

だから、十字架することのできないこの私というもの――我々、あなた方一人びとりです――死に至るまでダメですよ、我々は。そんなダメなものをいつまで問題にしていますか、というんだ。私は自分なんかもう、その意味では徹底的には問題にしないわけです。そんなものは問題にしたって始まらないから。キリストは、

「お前は何を問題にして、何をグズグズ考えているか。全部、解放されているではないか。それは、地上ではいろいろ問題があるだろう。学校の試験の問題もあるだろう。就職の問題も、結婚の問題も、いろんな問題があるだろう。いいよ。それがどう行き詰まろうが、どうひっくり返ろうが、いいよ。この私の生命を受け取れば。」

と言うんだ。

「私よりも父母、兄弟姉妹、妻子……を愛する者は、我にふさわしからず。我が弟子となることができない。己をも憎まずば、我が弟子となることができない」

とキリストは言われた。こんな激しい言葉がありますか。およそ、いわゆる道徳を踏みにじつているような言葉、突き破っているような言葉です。だから、私はキリストの言葉を「ドウルヒブルッフ」(Durchbruch)と言うんだ。そういうように、もの凄く突き破っている言葉が実は、一切を包括して一切を救い上げる実力を開示してくれるんです。だから、

『³⁰なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なる汝の神を愛す



べし』³¹第二は是なり『おのれの如く汝の隣を愛すべし』此の二つより大なる誠命^{いましめ}はなし」(マルコ12・30～31)

という。「心を尽くし、精神を尽くし」というのは、

「99%は神さままでいいが、あとの1%は残しておけ」

なんて、そんなのではない。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして……」というのは、『100%に神を愛せよ』ということと、『隣人を愛せよ』ということは一つだよ」

ということです。まるで矛盾したようなことを言っているが。

100%に、この一直線が、神さまとあなた方一人ひとりの関係が一对一の100%の関係に立つたら、一生懸命に自分をぬけてみたら、どっこい、向こうから光がきていた、向こうから生命が流れてきた、向こうから愛がさしてきた。私は100%になれるのに、向こうは100%でやってきた。ああそうでしたかと。「隣人を愛せよ」という言葉は、神さまから流れてきた愛をもつて、今度は隣人を愛せざるをえずという、ちゃんと実力をもった言葉になる。キリストの言葉は、そういうように読んでいかなかったら、読めませんよ。

「愛せざるを得ず。はい、そうです。私は相変わらずダメですけども、何か知らないけれども、そういう衝動がわいております」

と、はつきり言えます。

●信行一如

そこがいわゆる信仰プラスアルファ、「信仰と行為」なんて言つて、一生懸命で研究したつて、どうにもならん。「信のみ」と言つて行けば、もう信行一如となる。なぜみんな、信行一如と言わないか。私がこんなことを言うものだから、嫌われるんです。異端だと思われる。この「行」は惨憺たる行ですよ。キリストみたいに100%の行はできませんよ、私は。けれども、この「信」において本ものならば、この行はどんなに惨憺たる行でも、本ものであるんです。付け加えた行ではない。どんなに虫に食われていても、これは造り花ではない。皆さんが、どんなに氣息奄々、あるいは満身創痍^{そうい}のような身体になつても、

「私の中にはキリストの生命が生きている。死んでも死なないぞ」

と言えるためには、この一如一貫の信・言・行がみな貫いてなかったならば、生命はこないと。真理は一貫しているんです。

だから、私はいわゆるプロテスタントでも、いわゆるカトリックでもない。私は「ウル・クリステントウム」(原始キリスト)と言う。ゲテというひとものこの「ウル」(原(元、源))というのが非常に好きだ。「ウル・エバンゲリウム」「原始の福音」という。「ウル・エバンゲリウム」という言葉をダイスマンという人が本の中に書いている。

「キリストが説いたところの原始の福音は……」

と。私が製造したかと思つたら、ダイスマンがもう既に言っていた。



そういう根源の世界に私たちが行くためには、このキリストの十字架に、十字架されている我ということに気がつくことです。

「なるほど、あそこに私は全部、片づいてしまっていましたか」

と。キリストはもう、皆さん一人びとりに、

「もう問題はありません。なぜ、ぐずぐずしてますか。なに考えてますか。どうなつたつていいじゃないですか」

と言われる。「どうなつたつていい」ということは、単なる諦めを言っているのではない。「どうなつたつていい」と言つて、本当に向こう側に献げてごらん。そこから、道が行き詰まったと思つたら、どつこい道が開かれている。思いもよらない道が開かれている。人間の思案、憶測、考え、小さないろんな計画、そんなものはみんな破れて、神さまの計画が現れてくる。その人にとって最善なことが成つていく。その人にその時は最善にみえないようにみえても、必ず最善がなつていく。

●十字架と復活と聖霊

自分が十字架されて、本当にキリストの中に入つて、

「もはや、我生くるにあらず」

となつたら、何かしらんが、新しい力が、生命がくる。決して、真空にはしておかない。もうこれは、十字架と復活は離すことはできないから。皆さんはとにかく、そういったことになつたならば、何かしらんけれども、楽になるですよ。聖霊がくるから。生命が来るから。光がさしてくる。

「では、十字架というものは一体何ですか」

と、もう言うこともない。それほどまでに、私たちを救いとうとしてゐるキリストの愛です。神さまの愛です。だから、

「十字架はこれを受け取る者には神の力である」

という。この愛によつて私たちは本当に喜びを、力を与えられていく。ということは、もうそこには復活の生命が、聖霊が臨んでくると同時になんです。決して、二段構えではない。

「己が十字架を負いて我に従え」

とキリストが言われるんだけど、このキリストの十字架によつて――十字架されるということを、十字架されたという恩寵を――十字架されている我というものに気がつくまでは、「己が十字架を負う」ということはできないんです。

だから、キリストの言葉は、この場合いきなりこう言われたつて、それは無理な話なんだ。キリストの言葉は、福音書というものは全部、十字架のキリストを経て初めてこれがつかめてくる。福音書の言葉が本当につかめてくる。



「今は、私の言うことは、みんな分らない。受けとれない。できないよ、躓くよ」
と、キリストはもう分かっているんだ。

「けれども、私が受くべき十字架のバプテスマを受けてしまったら、そのあとで、お前たちは、私の言ったこと^しを為たことがみんな分かるし、また、大きな業をしていくことができる」

と言われたのは、そのわけです。

●二重の戦い

「己が十字架を負いて我に従え」

と。私たちの、クリスチャンの生活の質は、十字架を負って——私は題にただ「十字架」と書いたけれども——己が十字架を負って進んで行くということ。「己が十字架」というのは、もちろん、常にキリストによって十字架されている我というこの土台からして、皆さん一人ひとりがそれぞれ、

「己が十字架が何であるか」

それは人によって違う。煮詰めれば、共通なものだけでも、具体的にはみな違う。いろいろな肉体上の欠陥があったり、あるいはいろいろな、家族の問題だとか、あるいは事業上の問題だとか、あるいは結婚に破れたとか、いろいろなことがある。いろいろな十字架があります。

けれども、それはキリストに十字架された、キリストの愛の生命をいただいていくならば、その力をその生命をいただいていくならば、これはどんなこととも代えることのできないものをそのうちに持つておりますから、必ずそれを負うことができる。そして、苦難にあればあるほど、パウロやペテロも言っているとおりに、かえって神の国を現する使命をそこに自分は見いだしていく。神の国を現する者は必ず何らかの意味において苦難を負っている。苦難のない生涯なんていうものは本ものではない。何らかの意味において苦難を負っていく。その苦難は、一人ひとりととって十字架である。そして、神の国をそれによって建設していく使命をおびている。この世は罪の世であり、自分自身がその罪びとそのものである。二重の戦いをもつていくわけですから。苦難があらざるを得ないわけですね。

●逆に救い上げていく

そうすると、御意に従っていくところには、今失ったと思ったものにもはるかに素晴らしいものが逆に与えられていく。たとえば、他のキリストの言葉の、マルコ伝10章29節のところに、

「^{あるい}29 イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、



「或は妻」という字もあるんですよ、ここは。

或は田畑をすつる者は、³⁰誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。

即ち、家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、

永遠の生命を受けぬはなし。」（マルコ10・29～30）

とある。失ったと思ったら逆に、捨てたと思ったら逆に、それは非常にその人たちを救っていくことになる。その人たちを本当に逆に救っていくことになる。だから、一切を顧みないと思ったら、実は逆に一切のものを顧みるという。これは不思議です。本当にそうです。人間的に顧みているうちは大したことはない。けれども、一切を一遍絶つてみたらば、逆にそれを本当に救い上げていく存在になる。その人の存在そのものが、そういったものをして在らしめていく。そういったものをして救い上げていくようなことになっていく。それは何となれば、これは己が十字架を本当に負っていけば、それによって、愛が生命が流れていくからである。

私たちの信仰の質は、己が十字架を負って福音のために進んでいく。それは決して、力みではなくして、進まざるを得ずということ。またそれは私の、あなた方一人ひとりの喜びである。本当のものには必ず歓喜がある。歓びが伴うわけです。パウロがあんなに迫害され牢屋にぶちこまれても、

「喜び喜べ」

なんて言って、ピリピ書簡なんでものを書いている。ああいったものは、パウロは本当に、「十字架を負う」ということがもはや、負っていて負っていることを知らないような、自覚しないようなところまでいってしまうわけですね。

「担ってやるぞ。大丈夫、担えるぞ」

と。

まあ、私は自分で大言壮語してはおかしいけれども——大言壮語ではないですよ、ないですけども——無教会の方々はみんな私をそっちのけにして、

「あいつはおかしくなった」

と言う。いいですよ、「おかしくなった」と言われても。けれども、私の意識としては、何も垣根をつくっているのではない。全無教会の方々を自分は背負ってしまっているというような気持です。

「己が十字架」というのは、そういったような意味において、本当に愛の力をもって何かを背負うということです。愛の力をもって何かを背負うということができるんです。何となれば、これは私の中にあるところのキリストの力だから。私の力ではないから。私の信仰なんていうものではないんだ。



●四つの「L」

キリストの生命、キリストの愛というもの。十字架の形は「L」が四つある。オランダの風車もそうだ。ドイツ語でいえば、「リーベ」(愛)、「レーベン」(命)、「リッヒト」(光)そして「ルフト」(気)——気とは霊気のこと、聖霊のことです——の四つのLの字がある。十字架されてみると、この四つのLが自分の中に入ってくる。キリストの愛と命と光と聖霊の気、神の気とが来ている。これが来ていけば、他に何が要るか。

「**己の生命を失わば、全世界を得るとも何の益あらん**」

と。今度は「ゾーエー」、本当の生命です。本当のキリストの生命が十字架を通してきたならば、キリストの十字架は全世界を負っている。また、十字架というのは世の末にいたるまで、神の国が来るまで、この罪の世を背負っている。私たちも質的にこのキリストの十字架と同質的なものをいただいている。もちろん、私たちは罪の贖いはできませんよ、キリストではないんだから。罪の贖いの十字架はキリストの十字架だけです。

「**十字架の苦難の欠けたるを補う**」

なんてパウロが言ったけれども、その一端にあずかることは、

「**聖国を来たらせたまえ**」

という祈りの存在は、自分が本当に聖国を来たらせる力をいただいて背負っていなくては。

「**十字架を負いて我に従え**」

というキリストの言葉が、何か苦しい言葉であつたり、何か自分の気持をふさぐような言葉であつたり、それ自身が重荷であるような言葉に響いているうちは、私たちはダメなんです。

●天的現実

それでは、一体どうしたらそういうように負うことができるか。その力の秘訣は、秘密はどこにあるか。祈りであります。祈りが足りないところはダメです。

私は二言目には無教会のことを言つてすみませんけれども、みな立派なお祈りをなさいます。私も無教会でそういった祈りのところを通つてまいりました。集会でも祈られしました。みんな結構です、私も一生懸命に祈った。けれども、なお足りない。

使徒たちや預言者たち、いわんやキリストは、また本当の隠れたクリスチャンたちの祈りの深い人は祈りは——私たちにとって生命の呼吸ですからね、私たちは空気を呼吸しているんだけれども——聖霊の生命を本当に受けとつて、そしてそういった本当に十字架を負う力をいただくためには、魂が祈りの魂にならなければダメです。これは自分で実験してみれば分かる。祈り心地で、いかなる時も、歩いていても電車の中でも、何か仕事をしている或る瞬間でも——何も言葉でどうのこうのと祈るということではないですよ——魂の祈りの角度になつている。そして、そこに或る時には御言が閃いてきたりいろいろでしょ



うけれども。ある時は、もうただ心の中で、

「キリストよ、主よ」

と、ただそれだけで、切り開かれたキリストの胸の中に入ってしまう。「主よ」と言うときには、気がついてみたら、キリストの懐の中にいた。地上にありながら、天上にいたというわけだ。地上にありながら、自分は天界的な、天的現実の中にある。私はこの天的現実という言葉は、自分で造ったかなんか知らんけれども。この天的現実というものが私は大好きなんだ。どこにいても、これは天的現実です。即ち、自分自身が天国体^{からだ}にされる、天国の体^{からだ}にされる。地に在って地になし。藤井武先生が時々、

「あなた方は本当に死んでいますか」

なんていうことを言った。「本当に死んでいますか」ということは逆に言うと、

「本当に生きてるか」

ということになる。天の生命が来れば、自分をどうこうしたって、他の運命や境遇やあるいは人が、私をどうすることもできない。あなた方一人びとりをどうすることもできないです、この生命がきていれば。

信仰とは、何かあっち側のことを信仰しているのではない。もつとも直々^{じか}な、もはやキリストと離すことのできない、

「我とキリストとは一つである」

ということです。私とキリストとは一つである。

「私はお前と一つにしているじゃないか。なぜ、一つではないと言うか。この十字架で切り開いて、お前に助主^{たすけぬし}を与えているじゃないか。慰主^{なぐさめぬし}をやっているではないか。なぜ、これに慰められないか。なぜ、これに助けられないか。これはいかなる力よりも強い。いかなる慰めよりも慰めは深い」

と、キリストは言っているんです。私はそういうわけで、本当にそこに涙するわけです。「サマリヤびと」という、ハンブルクで話したあの中に書いてあるでしょ。誰も知らなくてもいいという。そういうキリストです。

●愛の力をもつ

私は、今朝もう5時に目が醒めて、2時間ほどじつと祈っていた。そういうわけで、もうキリストの懐の中に入ったら、もう何がどうなってもいい。そこから、本当になるほど十字架を負うというのはなんと楽しいことであるかと。

「神の国を現じ、福音を証しする」

ということが即ち、自分の「十字架を負う」ということです。でなければ、天国は現じてこない。

日本人には、この「十字架」というものは嫌なものなんです、こういう血生臭いものは。



私だって、十字架そのものは、何も私はいわゆる十字架の殉教の死を遂げようなんて、そんなことは思わない。けれども、心はですよ、心は――ギリシヤ語で「証^{あかし}」ということは「殉教」ということと同じ言葉ですから、「教えに殉ずる」というよりかむしろ「福音に殉ずる」と言いたいんだけど――福音に献身し証する。あなた方は生涯何をしていますが、全生涯が献げられたるものです。でなければ、その仕事に力がきませんよ。キリストに献げられたるもの、福音のために献げられたるものです。福音のためには、このキリストと共に天国の十字架を負う。言い換えると、力の源泉なんだから。

もう一つ言い換えると、さつき言った

「十字架を負う」

ということとは、本当に

「愛の力を持つ」

ということです。愛の力をもつ。

「愛は一切に勝つ」(アモール・オムニア・ヴィンキット)

とは、ヒルテイーが好きだった言葉なんだ。愛は一切に勝つとは、敵を倒すのではない。敵を担い上げる。敵を担い上げることは、十字架を負うということなんだ。もう敵もいやしない。天下無敵者だ。天下無敵。向こうはいくらこつちを敵と思ったって、敵にも何ものなりはしない。キリストの愛がくれば、「敵を愛せよ」というキリストの言葉は氷解してしまう。敵が無くなってしまう。まあ、何と驚くべきことかと思えます。人間の思想でも、人間の単なる意気込みでも何でもありません。

それが本当にキリストによって、

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや生くるにあらず。キリストわがうちにて生き給うなり」

と、そこに

「十字架を負う」

ということの本当の事態がある。これは

「本当の愛をもつ」

ということです、十字架を負うとは。

「本当にキリストの愛を持つということが、これが天国を現するという、その人身が天国体となっている」

ということ。

このようにして、キリストの復活への道としてこの十字架というものが本当に私たちに、キリストの十字架を受けると共に「己が十字架」をそこに持つということによって、この復活の生命と切っても切れないところの事態がまず深く自覚されなければならないと思うわけであります。

